

「朝鮮通信使」をめぐる戦後日本市民社会の歴史実践：在日朝鮮人歴史家・辛基秀（1931-2002）の活動を中心に

山口，祐香

<https://hdl.handle.net/2324/4475218>

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	山口 祐香			
論文名	「朝鮮通信使」をめぐる戦後日本市民社会の歴史実践：在日朝鮮人歴史家・辛基秀（1931-2002）の活動を中心に			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松井康浩
	副査	九州大学	教授	三隅一百
	副査	九州大学	教授	波瀾 剛
	副査	九州大学	教授	鬼丸武士
	副査	神戸大学	教授	木村 幹

論文審査の結果の要旨

本論文は、朝鮮通信使資料群の UNESCO「世界の記憶」への登録（2017年）に結実をみた 1970 年代以降の日韓の自治体・市民による通信使関連文化事業を見据えつつ、その事業の起点となった在日朝鮮人歴史家・辛基秀の活動および日本の知識人や市民との協働の様相を分析し、様々なアクターが関与した「歴史実践」(保莉実)の軌跡を戦後日本の市民社会の文脈に位置付けたものである。

本論文は、序章と終章の他に本論 5 つの章から構成されている。第 1 章では、辛基秀の個人史を彼の運動経験に即して振り返り、1970 年代に組織を離れ個人としての活動を開始した辛が通信使に着目する過程を描いている。第 2 章は、辛基秀の映画『江戸時代の朝鮮通信使』（1979 年）とその上映運動を取り上げ、視聴覚メディアを介した歴史実践による通信使の歴史の語られ方と人々の受け止め方を比較検討している。更にこの章では、韓国訪問とそこでの体験を通じて日本と韓国の間で生きる「在日朝鮮人」であることを自覚した辛基秀が、埋もれている日朝関係史の様々な題材を発信し、両国民の相互理解に貢献することの中に自らの活動の意義を見出していく過程を考察している。

第 3 章から第 5 章では、辛基秀と日本の市民の間に築かれたネットワークに着目し、1980 年代のローカルな市民運動による歴史実践が検討される。まず第 3 章は、1984 年から 3 年にわたって実施された「朝鮮通信使の歴史をたどる旅の会」の活動を取り上げ、辛基秀の企画・引率により各地を訪れた参加者たち（日本人・在日朝鮮人含む）が旅の経験を通じてどのような歴史実践を行ったのかを、参加者たちが書き残した感想記録のテキストを手掛かりに浮き彫りにしている。続く第 4 章は、1984 年の「大阪築城 400 年まつり」に異議を申し立てる市民のカウンター運動と、文化交流および歴史資料の収集・展示を行う拠点としての「青丘文化ホール」の開設という 2 つの具体例を通して、辛基秀が公的な歴史の語りに対抗する運動としての歴史実践を、関西における同時代の市民運動と連帯しながら展開する様子を描写している。さらに第 5 章は、対馬を始めとする各自治体で通信使を題材とする日韓交流事業が成立・展開する 1980 年代後半以降の時期に焦点を当てる。この時期に辛基秀は、関西で人権教育と関連づけた通信使の歴史展示やシンポジウム等を実施しながら、同時に、自治体の通信使展開催や顕彰事業にもコーディネーターとして深く関与した。歴史顕彰を通じた地域おこし運動に辛基秀が協力する過程とその意図を検討し、在日朝鮮人である辛基秀が自らの活動とアイデンティティをいかに日本の市民社会の中に位置づけていったのかを分析することで、本論を締めくくっている。

本研究の学術的意義としては、第1に、辛基秀という個人のライフヒストリーと歴史実践の事例を取り上げ、民族運動や集団的アイデンティティの考察に傾きがちであった従来の研究を批判的に見直し、個人の実践にも焦点を合わせた近年の在日朝鮮人史研究の蓄積に貢献している点、第2に、社会運動や地域おこしの観点から通信使に着目した多様なアクターたちを辛基秀との関係性から見たネットワーク上に結びつけ、日本・韓国・朝鮮をめぐる越境的な歴史実践の広がりを実証的に明らかにした点があげられる。

以上のように、本論文には学術的意義が十分に認められるため、論文調査委員は全会一致で本論文を博士（学術）の学位に値するものと評価した。